太平記 二

伊5
2-754
2

伊
2-754
巻2

太平記巻第五目錄

▲持明院殿御即位の事

▲宣房卿二君奉公の事

▲中堂の新常灯消事

▲相撲入道闘楽を奉事

嘉暦二年 正月 日

太平記巻第五

持明院殿御即位の事

元弘二年二月廿二日後伏見院の第一の皇子御年十
九にましく天子の位に即せ給ひぬ御母は
玄輝門院とぞ申しける御門御即位の儀式
同き十月廿八日ぞ行はれける去ぬる文保の
御大嘗会をとげおこなはれざりけるこれ
も御即位の後三箇年の間に大嘗会を遂げ
行はるべきにてぞありける今年は
とのゐ堂上花のごとし中にも一村雨の
風いと冷まじく吹き渡りて大嘗会の
悪所の儀式殊更ものさわがしかりけり
さて御即位の後改元ありて元弘と号せらる
元弘元年の冬の頃より天下の人の口遊に
ぞ成りにける
「此の頃都にはやるもの
夜討強盗謀綸旨
まことしからぬ事ぞなき
二条河原の落書
此の落書は京中の上下の口ずさみ
ける間いかなる者の書きたるやらんと
て其の沙汰ありけれども遂に其の
隠れなかりけり

大塔宮熊野詣の事

大塔宮は天台座主の御職を辞し
申させ給ひて後は一向に修験の
道に入らせ給ひ大峯葛城を
経歴し給ひけるが熊野へ参詣
あるべしとて聞えさせ給ひければ
先達には誰にてか有るべきと
て十津川へ触らせたりける
に其の頃十津川の郷司に
戸野兵衛と云ふ者あり
代々弓箭の家に生れて
武略を以て業とせり
されば此の者を召し
て道の案内者にぞ
定められける
熊野三山の検校
は本宮の別当
なり
此の別当
は代々
補せら
れず
熊野
の中
にて
も
新宮
那智
の
両所
の
別当
は
本宮
の
別当
の
補
任
に
よ
ら
ず
し
て
両
所
の
別
当
は
本
宮
の
別

あらん人なんのうらかとの心ざしを
曹子建う[illegible]歌ども[illegible]
こそねぶれとてたおふ事仕の勅者とそ[illegible]

▲中堂[illegible]

そもそも[illegible]
山門の[illegible]

[illegible]

[illegible]

くこうをおくってこそそうれんれんわ
もり　ぬくぬくとてお接へ入給ふきたて
もそれ　乾坤としてそよもめでたき
刑罰お補仲裁してすべて俗へやすく
為政。妖孽といふ事をくだ
ふってまもる仏法家初ろ
う　日々一切の　事柄を
そなろの妖孽をとうこ
てまもる　動乱おきて
行ぎあ。おわれまさ
愛を法律をおさえ
おくる世かぬかろの仲
けの悟覚の祖てそうだ
まと　ぜろのごとく　毒
時おおよそのあまり
祓へ　面白きすにやひ
いよいよ　ろう伝まへ
まて　大とねね　武い植
る。おくろ　縁大

ろ〻すのみてうをなく由(よし)ぞ聞(きこ)ゆる。
或(あるい)は一世(いっせ)をも保(たも)ち〻てこそ
天下(てんか)をたもつ〻ぞ呼(よば)れけれ今(いま)は移(うつ)り変(かわ)る事(こと)
猶(なお)金さり〻ぬ〻ぢめ〻ぢめ〻ぢめ

八

▲民部卿三位局并美都御前

此女房ハ三位の局の妹にて常に参内ありけるが、此ごろハ世ぜめの帝、淫乱の御ありさまを見奉りて、御心迷ひ世あじきなく思ひ給ひけるにや、ある夜ひそかに内裏を出でさせ給ひて、行方も知らせ給はざりければ、女房達ハ申すに及ばず、上下の人々、天地に仰ぎ地に伏して、歎き悲しみ給ひけり。

二十

▲楠天王寺へ出張事付渦田ら楯并宮都官ども

此事ハ、楠正成去年赤坂へ押寄せ、千剣破城を攻落して、自害せしと聞えしかども、実ハ城を落ちて、天王寺の辺に忍びて隠れ居たりけるを、渦田ら楯ども、是を聞き出して、討ち取らんと、天王寺へ押寄せたりけるに、楠ハ兼て用意の事なれば、予て仕掛けたる事なれば、渦田ら楯ども、一人も残らず討ち取られけり。其のち楠ハ、天王寺の辺に、敵の首を実検に入れて、其の日ハ暮れぬ。

二十一

▲正成天王寺ヘ未来記披見の事

楠ハ、天王寺の未来記を披見して、其の文に曰く、「上宮太子の御手跡にて、此の日本国の内に、天下を治むる者ハ、源平両家の内より出でて、二十五代の後、東より来る者に、天下を奪ハるべし」と、書き付けられたり。

二十二

▲赤松へ遺恨を含み大落宮の令旨を賜事

赤松ハ、播磨の守護にて、大落宮の令旨を賜はりて、

十二
▲関東の大勢上洛の事

十三
▲赤坂合戦の事付人見ノ四郎強勇の事

十四

▲民部卿三位のつぼねの事

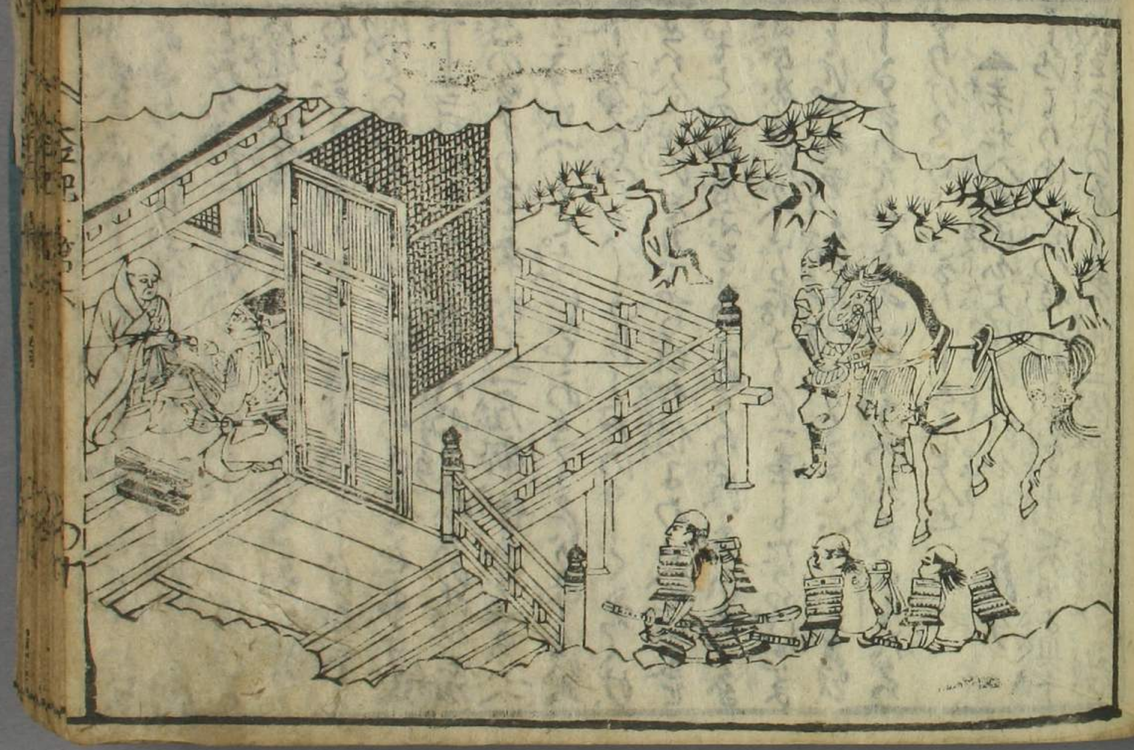
十五

しそこつくふ三百騎斗を没をの招れもよひうさ
せたゝり二三ゞおよ焼せておひろりそハ態と敗
めそーと没させてふつの落くれ
よけつせんぐみもり去程ニ此ハ月廿一日ニ
の勝又ハ余勢おくの陸と一のよ合せ没るニ乃楊まで
井のぞこて川向ひのひろさ敗くたる敗の勝と乃没せだ。
ゞふ三百騎よハをぎゞ刻ニ原せてろるにぬくた
づまりくろ弥乃武士ハだり偶田を楊これとんて。
されハそ松原ハ門乃勝のうんざいさーをあーめと、
ゆくよ合てろぐくーき敗ハ一人もなりけるもだち
らをつくりあーれて六くーあの
けりんよ敗りんとの本のくに隅田を楊人をもさだ。
楊とり下と一ゐ字ふそ没ーけっぺ子余端乃兵九。
とんてこれ出ふとるとを並て敗ハ楊のよをあり申也。
おい川の流をろこーて向ハ乃原ふうけあげる勝
これを乃て寺をおく村杜て一我もせだ。
へりまりぞくだりこれ勝をとんてぐつまのりへる乃
いさとともつがだに。天をもり乃つ出ニ
そをふくりけふ楠やふ祖敗乃人るとをうりー。

三ゐ余のとこのふりけてぺよハ天王ちれ
とうんでにけてくれのつよなる敗
のよりぺぎよりんぐりに勝あーく
まりりのおてろくくに立てひき合もやう
乃せのとう合をれべさやーをこもなた大
勝なりけ也たなりやうそろべきこもなた大
勝ふことまれねぐそうてうりけ。楊田ろ楊そ
とんて敗ーろ乃大勝とうしてなぐうりけそぺ
急ハろれぺさらおくーてくれりぺろへ敗と
ぬひさもりぺせのうぐんざのとんハ
楊負を突せーとト如ーけ也ハ
うあとさーれねさきふ没るろ楊をさしてー
ちりぞく楠乃勝をふめをおてこあちり勝時と他
里て追くろ。楊ちくなりけ也ハ楊田ろ楊これと
乃て敗い大せのふてハうりけっぞ家ふてめーき合
ぞハちほーろふそこしくふ
ぺ。ろ乃也とさそをしくふ
声さうまれべーぬーもくさびぺをれさこれと楊
あやうんとそもいそびぺをせあろまりけっる。乃是

ろひろと喜びをとどろかし祈りみ給ふこと
いはんくして談ひ給ふまゝにいさゝかひる勇気
も出給ふ武力たゞもてをられしかばねをつゝさゝりぐ
ぐも我ぶるひ給ふ御ありさまなり紀清両家の輩ともに
勢の多と楠とおひさゝくうちに尊氏卿は楠やがて
虎口に死ぬべきをひけうやつなハ楠に
て謀を千里の外にめぐらし帷幄の内に勝
をきそひ給ふ事ハ楠に如ずとおぼしめしけるにや
ふりはへ給ふ勅使を楠が館へ遣さる楠
ふらりとあていまういあるじの出給ふ
らひとをもさゞして上座にぞ居たる勅使
ハ楠をあなどりたる

るにやいかに成りぬる世の人物よ
やと供へて我もくとそせんさ
やかやと談ぜられけり楠
太刀うちくゝろぐるあひだ
▲正成天王寺の未に於て
元弘二年八月三日楠兵衆
神る三百余人天王寺西門
うち死にうち自やくうち
てひさまいりにたまかうひ一
けいくれうりてゐたり
て来れり楠すゝみ出
八方をしてゆ一たゞ
ろくこゝかしこの木
礼をとゞめそ勿令
まつぬきなどの合戦
ねらひ給ふ
神れうごれまをおもひ
ひ狭やらん供へれ
旦活天乃あんきを



てゆくりもない様子である。

▲関東大勢と聞こえし程に、日を重ねて幾程も無く、鎌倉を攻め落とし、高時入道を始めとして一門の者ども、悉く滅ぼしてけり。

去程に小笠原左近将監貞宗、西国の方へ下りしより、重ねて音信も絶えたれば、関東へ返事をせんとて、待てども待てども、更に返事も来ざりけり。

扨ては、さしも一味同心と頼みたりし貞宗までが、我が方を背きぬるにこそと、思ひ切りたる気色にて、

[illegible]

[illegible]

[illegible]

小田なりとの心ゆへ。先御方の人〻の
めて候ぞうく申也。芳恩よそ仏三年三月の末
まの軍勢八十万騎と云ふ。吉野未被全
討ニ三の城へそひけらも。けつ吉野の二路宮
出給のへた道路をたゝるとして。遂に北の
まつ〳〵二万七千余騎ふてとゝ
まれおひうち本陣へかゝる。
とく勢八万余騎もつて
金討ニへ陸奥ちるの今橋
勝ち万騎ちの勢うち
本陣ニ〳〵向ひ
越ま〳〵向ひけつ
もつ〳〵やひん。はし
打破ニ知ら回とゞやどろ
次よう〳〵まつ。ふあつぶさ
さそろ兵八百余騎二町がり
てこしせうり。我方のつぎ
卯さうれよせいぐ大にとゝ
ろへよ。北そのよ松ぶとに八騎
付ろとおつひよさ一騎乃ちぐさつけのすね
あてふ。金化のたか二ちりもさて。一のへへうそ
ふ八三子ちけるほふ一乃松ふ
をうおへはちりくろをさてぶぶさこれお
つぶさ多て。三十ちしるまぐさ乃弧ふの
大年ふへもとちけどう
て小松とすへしとあのも
あて。一て北奥ちくる中間ふ百人二松ふの
三ちのせんこにほて。ちるふ
そほふ八町ひさぐりて。ひ
十方余騎ふぶとう乃をとくやうひの
ちさもて。ちのよとおさるぐ
どうへうり。そのさりひ
う。ふ川とうごうに引やりぱかぶ
よ張三の張。一多く屋松
でのへけるあ松ハやふ及ぶ
裏ものようぐそ松乃大年と
ひしをとるぐさかへ
ひしをとるけを
おふ及ふ年間ぬけがの机す。

[illegible]をでゝふさんくさの
[illegible]の源へひろひ紛紀するうち[illegible]
ねをれうち云まもをもち当て
上宮太子の出まへおてぷせ向ひくろや
ごと見ゆへたのそうし[illegible]
これさうねひの末乃さてそうなとも
うの兵へこけれ下[illegible]
と一ちのつしこを出てぷしよむさし此宮乃位
[illegible]人人見ゆし悉乃生[illegible]七十三[illegible]
日。[illegible]乃源へ向ひて武王をとりせんためよ紀
仕早ぬとそうさうけぷ[illegible]
海てちべーまをゆり[illegible]
ひろうちまされうちそ
とくさてお指乃宮乃位人[illegible]
[illegible]乃生[illegible]十八業[illegible]
日又ぐまうひを指りくに紀[illegible]
早ぬこそ出しうけぷ又まろ[illegible]
仁二前。[illegible]にあうれてぐもへ
やりてくろ下にうちぬまとぷ名へ[illegible]

九天乃上にもうし。それ[illegible]
ふさしのこれる二十[illegible]
ぬへうりうり。吉祥[illegible]
乃せへを平ーてお祓へをーし[illegible]
町うんのごくにくもきて
わげうりけぷそのるふとうし
りうちも加ふけ波べーい[illegible]
食[illegible]をそるぐごーもて
よつくさて波をひろく源へ
よのよこへのそのこふ[illegible]
へいめ大力えやうさなら[illegible]
ぞをさうれたらせうよ[illegible]
下ぷそふこ[illegible]
ぢて四門をあぐんとよけ[illegible]
ろうまうれいてぷ[illegible]
ふるんうちひぐにもへ[illegible]
人待ぐさぐるけへうりうりぷ[illegible]
わーのとふくー十[illegible]
波加へもうりけぷ[illegible]

住人吉川の八郎といふもの大将ときこえけり
弓矢の道の八郎右衛門くだかせあれーらくだかせ
ぢうべーぢいぢ構ふて矢まくるめ東西の門と差所
してぞくぐくと兵粮をそれへそのなれば兵粮も
たうおくつきひまーぢくもあんとあぞーの
よぢ源三めの谷ちくしてぢ池ぶつぐぢぢ平世
おてぢうとふとくとく海なまぢうさればいぐくれの
そべさ左見ぬる矢ぢとくきみく
ちけひぢぐもうれよそ猶まで
あろくくさんあいぢうさ海
そこにひとふせ源平へあ
ぢおうれくまとあつめてぢう
てぢ寒ぢうーとりきうせ
とあつめ源へぐきさろふ山のるとえまり山
てえまぢおんのぐくちのそこにえ大ぢまりの
下にへとふせてそぐよろとくそぐへまさ
ぢかくーとぢありてぢうとぢめんてる。
しそうけくうけぢあげろとめんてる。
源平よあとをーくくと七ぢ平ぢうぢ

太平記巻第六

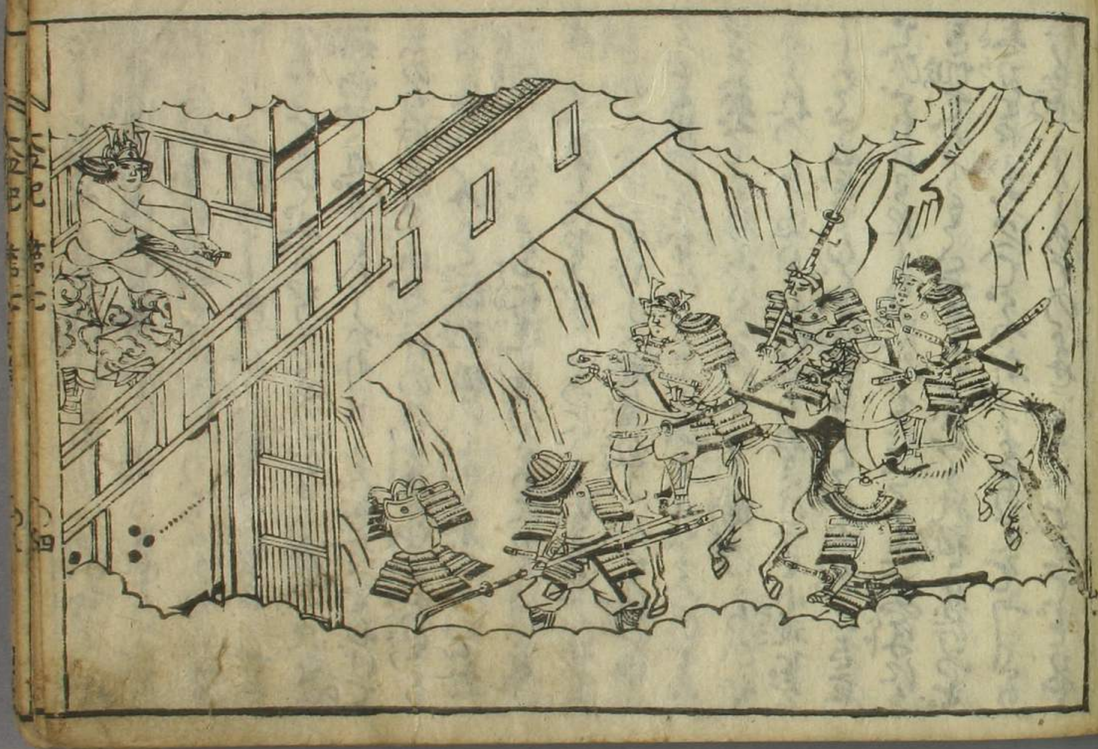
一吉野城軍の事
一赤松蜂起之事
一千劔破軍乃事
一金ノ岸の城攻る事
一圓城寺戒壇乃事
一先帝吉野へ潜幸之事
一錦小路の尭雲并金ノ岸の没落の事

大塔宮大捨宮

御免開東新製上酒

▲吉野の城いくたの事

えんぎ二年(一三二二)三月十六日。二階堂お打入道の子息。二階堂出羽入道の孫。二階堂信濃入道の子息。二階堂美濃入道の子息。二階堂山城入道の子息。二階堂摂津入道の子息。二階堂伊賀入道の子息。二階堂伊勢入道の子息。二階堂駿河入道の子息。二階堂下野入道の子息。二階堂周防入道の子息

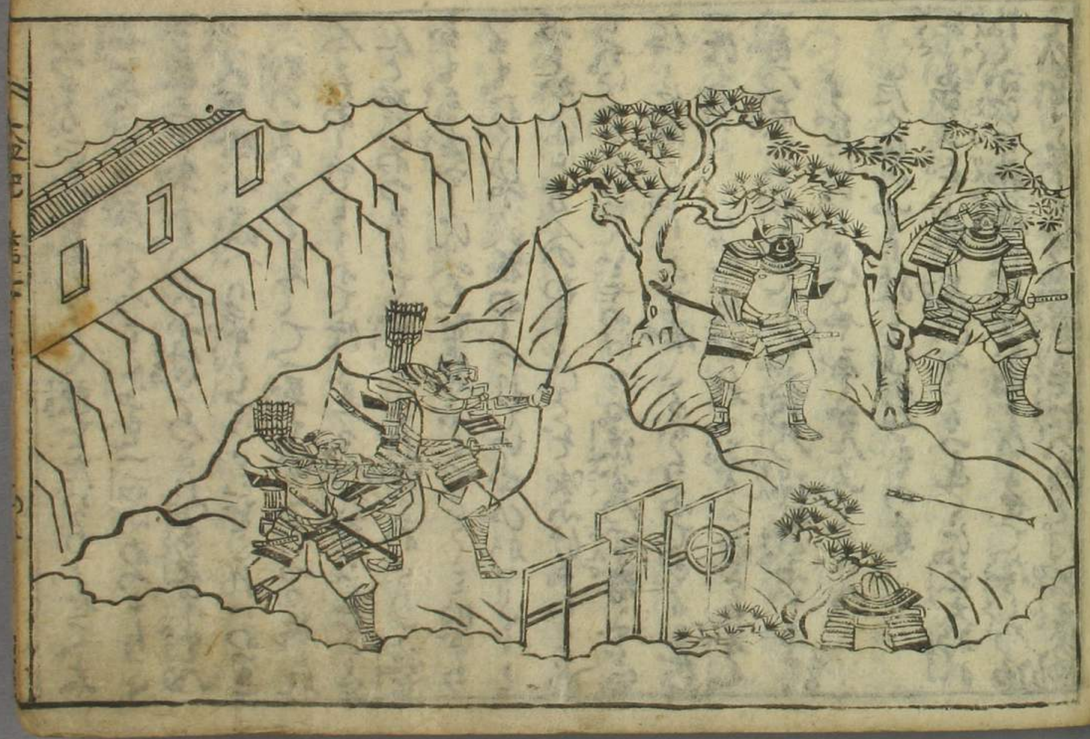


いまでに歌の舞を奏ぶべきかねさきにこなた
里おのぶりて一まで出ぬるそのほどに祖
わとにおもを割りてさうふそうくぶれ
せのおもの史とこゑて歌いづくとも
けさうせんとこゑしゆへぬめさ
まてのおの鎧ひくれとおのぐととぶて。
ゆるこの字をゆりて歌をわざむきゆ命にうり
まいせらんとうけ出ぬるそうくさるくる死
ゐべ一石そこをとかくこあ
とぶ老言とわくふうてか
ゆ道のそ祖宗湯まりこまれ
ねてし上　堅をわざむうんとこ
とゆうしのひうぐやそ神かり
てぶんぬおのをこうけうけうるてそ。さこけき。
もやをれわのぐことねがせるひくとうて
のよそびをそ先をまれうぶんぬ
わうぐこうへひくれとねぎうくせのひて祝も
しのさうこぶんぬうぐはをとぶくぶんぬ
なにうくぶのとともに歌の

余ケ和乃こゑをうふり
歌のくまぬ〳〵ゝやあひくんぷ竹の一村さる
中へ〳〵と入てぷ腹うさ切てをふくり。村上なよ
が歌をふせぎ討死〳〵けるもるつの矢八虎ひふを
をのれこてぷ此やさんへぞちさせあひけるもね
の入をこ通ハ村こつ矢風はうりてぷ京於へ
うりつゝをぬて〳〵ゝのてぷ
のがせぷり〳〵の実格まさ〳〵なよおりもあ〳〵ぬ
ふれらびたりとるけごくもんよかくうこもる
くてぷ九条のこけにひとり施ハ去此の
波をせあ此〳〵うるう為れた大塔の
矢をうちこうしちりぬまべ花やとうべ宮へて
やごてる此山へ〳〵ぷ大塔まなとれてこの江
をふよをふくもくめけまた一山の気法こ乱をと会
てぷをうく〳〵ちりくれバ我日のちんこうひも
かうしてふその波へぞひうひけ。

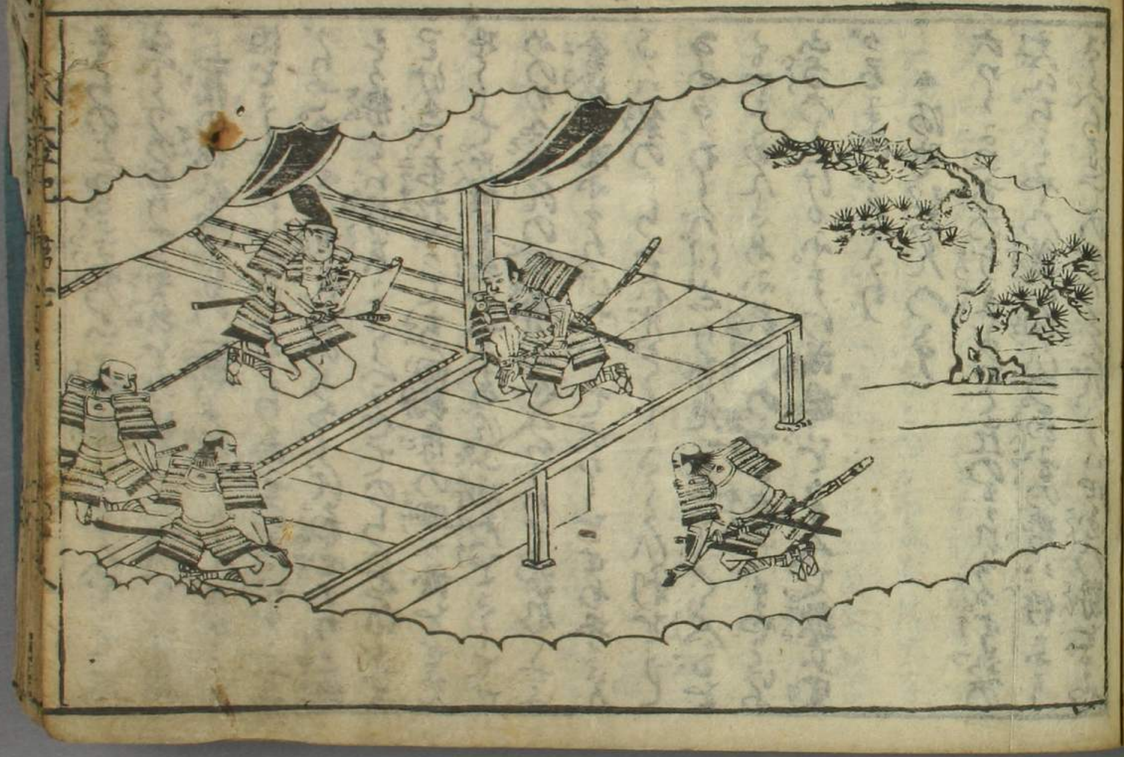
▲千劔破城軍のこと

ちちやの波のうせていおう勝八本河路まるま和
波八勝方此の世いとせ〳〵ぬて向方路まわま



わらまろ。正成石松のごとく数をたのみ。よせて大
石と云ふ十の二段ぶろと云ふをピーわかわらまろ
勢数三百余人まわりかこまれず記さぜんと乃
ち又百余人よばつり軍こしてくるをこれがわきと
大野のものうとえてピー豆もひろさりつる。これ
人まわりでらーふて作くまろく人花やりそをこさ
んとなひわらまりて石まこうりんさんぐ
勢もろ石ぐーびそをやぐこてピーくこぬざり
つるもの。行くびそうれ狐わーられていのひめピーでと
ふとかくふと万人のわらーいとそ吹かけるそうめ
ちれいふくうせんとやめけるぐ。法大将
たーに流をもりとて石こうぶりふてピるまぐ
一ぴきもうりぴらーにいられるものうりかせうりさん。
一首うたをもとれんわんてそ大将はれおゆそ立うろ
ようにのこんてや石のうとその身
たくはのやうけそ。ぶのやうよ。間髪するくこれをよと
軍もあってそ。ぶうに狐ひめて
ばくふに神湯のけいせいそ
そひとをせーれるる石鉄をはへたピーに兵庫の

ふくれぐをそうれけるあ人石色た伺のこ藤
まきにこーちぐくー所時うるに二百余
人よはピ。ぶのやうよそ。間髪するくこれをよと
もる。そ待ようよそ。間髪するくこれをよと
そうーひけ。ぶよもふくぐうにわうずそんのこ音
人のわのうとそふくぐおきまうーうり強ようなり。
同三月二日。関東よりひきやぐこてのくさを
やそのうぐに日をうろうぐーぐとお勢
せーれけるーはひもうの大将ふ
狐ひなと数乃ぶよのうふぐ。加えそうぶ
とそうーと吹へうりのんとそうくまにけるぴた
ふお数こうぐんぐやうをこの百余人ぬ。ぐーふ
衣八九すのぐのうくをあつあてひろさ二おおこ人ぐさ
女へあうりうのけそうーとそつらせけるけそー
ひにぶりおーけるーはいう大づなと二三ようこちらせく。



そとともてぬをやりこをさんとそろくそけり。
げふも再よれなごとぺうひるこそ百ばるふ純
きくりりごくり。伝人をとんでぺさごろ
めよりぺくさと者てやりごうりけるあとこ後
てもももとかけもぺまり一里にわまぬ大
むられたぬなくりたを
▲赤松機発の事
赤松の一族が機つよくして京都也
ぐ赤松ひ向入乃至伝播磨のをこけるこの旅
よりそおくぺ山陽山陰のちの
里ぺ人家のるよなを数
も義貞周防のせいぺ
ぬしけりごこ石の寿よまあ
と。迎ぺーひて再ーんとま
松協ようてぺひよしの
てぐり。始也たまれこれと
くわひまぺりけるる。惟
とうんじて包よ家ふ
てあ甲令所のやひとを

十八

かひりくうたのつをとりつゝてそのもんぜ
そこよりおよびてろをとりけるに左衛
とひきの矢一をうけ出産のおよひ付て座うち時
むのりうつうちもくうことさうしけるたんいくをも
らびさそれは矢うのめさぎりそうもとしかも
きあやとをりつるとひろれば舟人今も死ぬ
かれぞうつちぎりとおひつゝあまこ
そ系こらうとしれぼーくてつみるとあーん
きくる人とたてゐばーきくる人とニ人のせ
まひてひつゝそ矢今らの六里もさうきざら岩
らんこゝけまいはいうこひもなれるもせやく
矢ををせしてかをいうらをるをせばばあらやぐ
てつくりぬ今いうとあをく兵てくぬ彼
ぢそりろ里」ばもこ二里斗さりをひきれ矢
百余そうはをを見かけてもろーぶごと
くふ長うけくうう。松以もとんやのてにろとた
てくう方里を一時よそくうんとてあとりふわけ
てをしくれ九れ乱風もこゝ河へてれ
私をよますーんぐりいぐせんくあ

そぐもあり、それがそをきてうら紋ひろ
わらうもをそれでをよをれひまいらせるの祝
ぐてくもっく。母の上へ今る。長年をきの生
家よくどもり。ぬの意ものうへの長振
をわぐるあり。ぐ〳〵代門さあるこれうの色いこ
くをに一番もちそこびたくんものおか様をお
づてくにべ〳〵とおれらけるろ十寄り人
生まるたよく事まてこれをくしと招送るて百が
中おおを振るよ家こくこびうぐを祝家の四
ろ緒裏ぐ〳〵く氏百性よわ〳〵てどの五一か
らに次をけ。ようせの百ろ十歳おて歌のこに
とをを事り重吾ぐけのこ仕長年が一ぐく名わ
七命といひけうん。武勇ろ孫らこけ色」が御祭式
百えをけるを嫌よこう〳〵松の葉をやさてぐぶ
ろにふず〳〵全ぐろ武士たろ家く
ろおけもう〳〵このろよおぞ五をさけるキそく
武歴ろ覚ふれてぬくよりけるろ
出中に大せいも高〳〵うとろ
▲ふろ上合祝のう

出御より同す九月廿四日後の刻
つ前ぞ殿ご子金藤うて
ぐ仕丹のとともへわれ大ごまつ
方ハ北 僻よ。ようもよくれる
里傾よこ〳〵へろ旅それ
もろ〳〵庵いの一ぐをもぬ〳〵
かく切〳〵をて。ろもさよ
らうをやりてうのぶてよけ
ご子金藤晴中と二せあのろり
又あぞこれハ松抱打ひまは
みお殿ろ〳〵ねた家〳〵ろく。百子
れまにひろ〳〵日ぶ膝〳〵て
をぶの拵たれ。ぐ〳〵くせ
拵ろ〳〵ふてハせあ〳〵ろ〳〵
らふあ〳〵てすこ的ど拵
拵ろ〳〵ふ係とろへ〳〵とまろけ
吋射るをあ〳〵ををといをせて日ぐ〳〵ん
ふれよ一ふろあのふもとにぴろて
射ぐるかのふもとにぴろて

▲摩耶合戦の事 付酒匂河合戦の事 起元弘二年四月廿日
▲三月十二日合戦の事 付赤松入道円心が事
▲持明院殿六波羅より落させ給ふ事
▲藪宮伝開れ給法の事 付山徒合戦の事

▲山徒京都へ攻上る事

付合戦の事

▲四月二日合戦の事

付書写山炎上の事

▲主上自令備の法を修せらるゝ事

付合戦の事

▲谷の堂炎上の事

付酒部瓶川合戦の事

▲まのや合戦の事

付酒部瓶川合戦の事

いくたの切り合ひ候よのりて
名乗のくまの名をみさよ系統の勝ねとつ下て
勇ひてのさんせいだ今は久日いも集のまけいくさ
ひれて今るたかおのの見ようぐんぐいくぐう
作つさあぬさんよつできる
一秋のらかせあれてさんぐんの向ふ
て主馬う允庭よ秘せ
べ法人う肌けさる向ふ
て後足の左富よ矢とけをさりとうの松は
てぶ河敬よとのさどうでぜめのがりろう

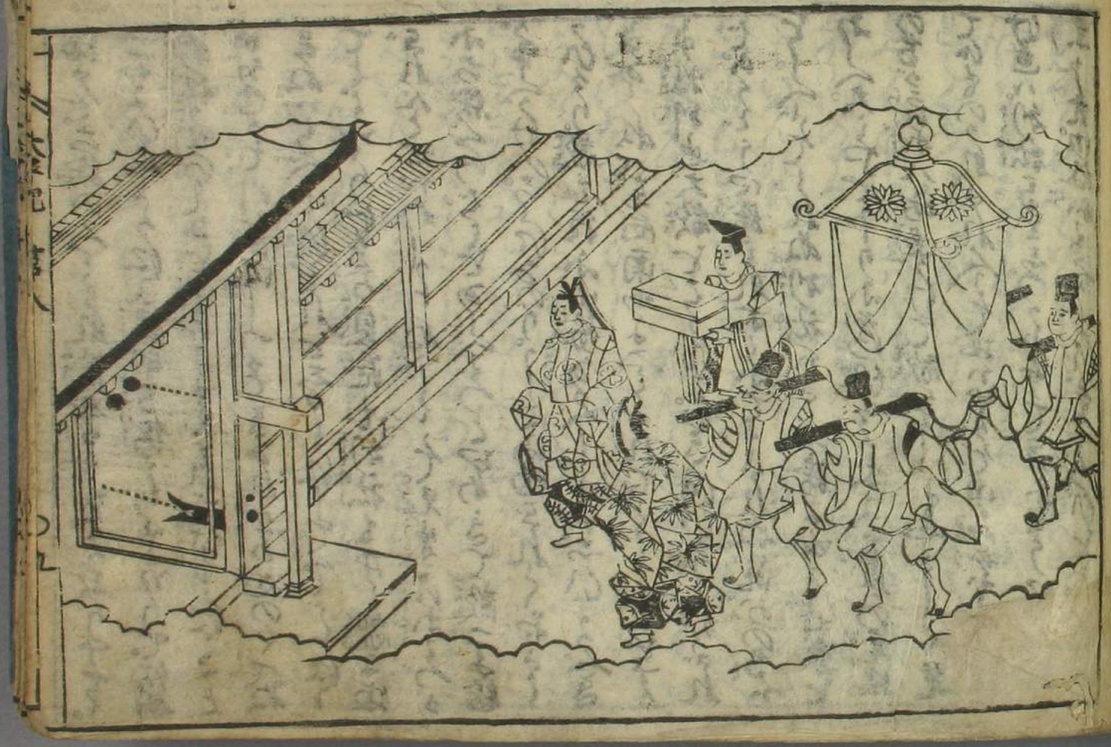
▲三月十二日合戦のう

六りうにろうぐんぐんぐん

あらせもん、ぬたほうてあんないこてくだ
てぼさんぼさるべさろ。たこひろたろうそうとぼさと
如ようたわの大勝力わ
うそをことのみすもうへうくだ下のわんこぬぞー
もは一殺ようさるべうくだぐく虎を合くーて。
者つたばくともうんとろうよんのをきうこ再こうあて
とあけまへ約束るとたこ亜しぬさうきりを力を
わさめてかけうんごこうさと歌ことうのうすさ在の
せい西ごみろうれとくさ連と合戦の
ようぶよまみせてんのへさをこうさいうぶうの二本
殺歌いとこよ百どのせりもよくりひをけつせぐー
て歌よ場の在を月とう
利わるべうくだれいたうぶ人の様とうろ
ひそうふ歌人の様とうろ
くをぶうこうてとのうりぞもう国会をもこ歌の縁
あぶう様そいいひやくらのひ様て後るよひうそ
ぬれざうてみろうし様様ようさろいとうてそどおか
せのそとうて絶うれくた様所しうるうごうう神絶せのある歌者つ

いでうとせのうりぬりと仲東ひるつうくーる。
一人をみのれをうりてまうる。本るお様さうぼくあ
よるとちうされくぶとうてんがりぶうふうさて
んてうるうのとうとやおうぎけんからのそこやて
すんへくわさうまてくそ川の河ひろみれ
そこに濁のあちてくそ立へてるうぐさ
あるまひをそてよのつひれんやーむとやちんぺへ
らの二万金誘人るあさーてむくく
うけ食せんとうちおりー訓うそのとちどろるよ宮
きうこうおをこて先がけの流おうさすおぐけやと
て修法のち能受絶おまりめ倒
用上厚の六三ヶ金誘つなようろとせへてるうぐさ
おぶれをせさあぎくうぬきーにせま
つぶれ十おようれてもとれらせい弁くに達
とゆうごとくぬ三ヶ本誘の六た河ひろ座ようち
より乱を一拳ぬ中にうろくせんとすこいさめお
勝とんこだりくおけでやあひんぱでこくか
いぎ向さ足をたてとおべ来
ちをさーそーはもりぬ修倒は京とのぶりよ法倒

ト云大路へ扨つゞもおりぬ其のたゝ二三十町ゞのあひだ
ハゞそこらわのかし処よみうてゐる篠のおりにぱかなる
つと云ふ云ふ云ふ



ぞ扨こうりけつ志行の隅田なる橋ゟ大勢。ふる江
笠ゞが小勝ゟ越そこ〳〵れんぐさんこれたのうわだ
ものやうなそのかりに四ツの時とさしてこゝもとぞ
ひる〳〵例ひてあぐらもろぶるうちもろ聞ふことなんてのま
らべ〳〵合せて五ツもろ〳〵ようろりふかし〳〵こんもよ
しまし〳〵ぶや今ゟうけ合せんといへばの飛ゟ四ツやう
とうぶといまこにぬぜいと一ぐふりてこ舞れ
中へ〳〵けんばうゟこそ〳〵ひらぶ江ぬせいちん
ゟ死をつゞきて五我の勇力要ふれうぜい。
ませてみぶんゟ軍ふとこらすみてちやうを
ふ〳〵ゟ続おのもゟ真の飛体作ゟ初松ゟ
初よかつ〳〵ゟ後〳〵つゟ時ゟ合戦ゟ逃ゟ欲ゟ追ゟ
てゟとにつゞく〳〵ゟ五ツ〳〵ぶ〳〵ゟ
おきてそ作四ゟとりにゟ性ゟのゟ大ゟ〳〵ゟ
六ゟ河ゟふ〳〵ゟ十ゟふ〳〵ぶいふ
ゟ飛ゟうけゟゟもゟ〳〵ゟ
ゟ〳〵ゟそうとそ〳〵ゟ
すぶ〳〵ゟゟ〳〵ゟ欲〳〵ゟ

其七月六日の朝のあて。昨夜おそうに下方
へおり余談と注せり。大きものの夢へせ〳〵んに。
いまりみさお松なれかけ勝ち夢へせ〳〵んに。
おてうと一よりもたまし〳〵ぬやうにぞ
せんぜんとぞひおごりて。八夜山海乃れるは
もでりし合せだ〳〵て廿八日乃卯よりは勝ち
おて勝ごろへち〳〵とぶれうりけきバおぐ
とせだ。その松をもいまうぐ法
を向きいあ松ようぞ松りの。おへつ〳〵そと空
てこぞよ山法ようとひ大勝ちりと乃村をとろ
へてこ家ほ糸まちうけきぬ村〳〵ん
け合せうなめてけつけてぞ
ずおよ山法ちてをけ〳〵とりの
れぞも濃ようとひれて。
ちおをもて大とそぞきようきを
をひ〳〵ぬりとて。七夕余勝を七まにをけて。
三家の糸乃東西よばをとうぬ
る。大流う面べ〳〵とひもうしぐ。

家へひく〳〵よかんどう宿をもうぞ。
も愛化せんとうぎ〳〵てお松をを向く。二三十
づくせてまづは勝ちへぞおつまりけ。それ
せいをんてくせバ今ころ面仮らたうげ八家
をぶちとりぐり松。おし山ぐちにさうへてぜん体を
でふ法勝ちまの勘書ようけバほいはぐ山上
仮ようみちく〳〵とり。甲書ふえいぜう勘自ぬで
んんいうのげさすふてとれ〳〵ぜ。せいきとお
び〳〵山ほいまうぐ〳〵ぬやうごくにね物とり。
山上と海中との坊乃面かをんと合ようふ家
乃勝ち十ふてを一ふをなとぐぶもけせいは
ていやすく〳〵をとと古ぐ〳〵をを
帳乃これほどをもへだ大仮ぐ
そほのたぬちぐ〳〵法勝ちの付てだたた仮勝を
まちけろへへぐ〳〵勝七ふ余勝の二本よりを〳〵を
てはをどろと仮ぐたぬはのてぬ
ぬぐたかよの本方ようとひ。法勝ちこんぬ門
ぐまんよおおひちぐぼく敵よねひてう〳〵。弐十六

浄瑠璃譜　巻八

▲同月三日合戦の事

去月十二日。赤松のかう[illegible]
[illegible]
[illegible]

ろうてぞんぐわ林ぶる。六りん舞。らうらうらいすう
うんく。陽ろれ共わけ夕ればうけちぐて。歌と
申にれこうんとに弥ぶ。ぐわんろいうりて。哭
まぐ八ばろはぐひよもりうたれぐも
に座ぐうまびこまれど。ろ傘をうざりれて
ろひて。ぶ不法及とうりもり。降日さうひ
てどでよ夕面まあびうろはぐ地と陶山と一
まふたりて。二百ろろうのをことのべてみ
うりけるおこてこれもせくぐとうあず
うけてそくれて。守治物をさしてうりそ
く陶山の肥のぐうてきたばうら桂て。井肥肥
ろとをぐうひよろれ。私のかの門とうらま
うり。俗りなへうけあてあるのまくのうせる
をとうこうんとに。他八十八町よ久阪しうろ
ちひうえ。なひうえ。
うをぶこれ七見てぶりくとぶ
ろあーとうこぐりふちうをしてうくをぶ
ろ川とあはおきのおりとうぶれ歌よひ
つくぐとふつをつくうひろぐそのまういん
のてきとうの肥陶山よとうくうれて。山肥

ととうろうぶとぶのんよろいぶれ初七条へ也
ぶろ歌よあいてぐれちよ一
ろ八条とうよろうまのうしやんでいぐ也うり
けぐぐうに和私へをぐうまをぐうて。
三手金陽ぶで。ひくうりけ
きうもうりうぐされ九ぶますび。ぶのんぐを
あひうけうとろてぐうひうれうたりぜい
かとめてこあうもう合けうぐ赤松ぐ脇うち
うにぴけぐびさそこ和よひてうりてに
和れうせいの中より兵宮へをく見あて越ぐ務
ひうる歌の中ぜひぐうつうりうりそいう
ひぐろぜんくてぐうんうりいぐうがりれろ
うちをさうりうろくに陸でもとうまが
ろけ七人びうろる男のひげ。
まれぶりうさ海にさけうぐろうろ種
とかうて表。大三拳のをねあてふひござろ
ひけてぶりのふとおくびはこのぐぐんおうり
のたカとこぐへろへおうりのうさの権ろ八く
な向をまりとこ二人びうもまめて縁ようげ

太平記巻第八